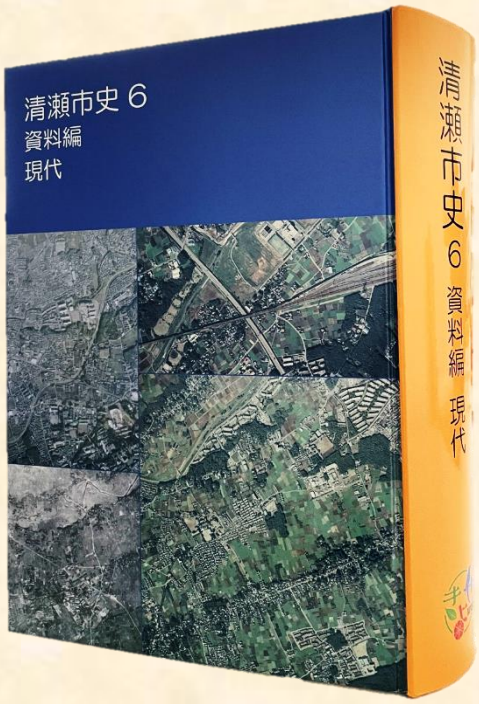
『清瀬市史　6　資料編 現代』

B5 判　約 800 ページ　掲載資料総数 469 点　令和 5 年 3 月 31 日刊　1 冊 2,000 円



表紙は、航空写真を利用し、現代の清瀬のすがた、まちの発展がイメージできるようなものとした。巻頭 23 ページに及ぶ口絵には、資料写真のほか、まちの姿がうつる写真を掲載している。

各章の内容概略は以下の通り

第 1 章　清瀬のすがた

昭和初期と昭和半ばの清瀬の様子を知ることができる資料として、東京府発行の『自治制発布五十周年記念刊行 市町村概観』(1938)と、清瀬町発行の『清瀬町のしおり』(1961)から、清瀬の姿を示す資料を掲載している。

第２章　昭和恐慌から戦争へ

昭和恐慌から戦時体制へ移り変わっていく中で、清瀬村で行われた政策や出来事の記録を、当時の村会会議録などから紹介している。

清瀬村役場の移転および新築に関する資料、灯火管制や警防団設置に関する資料、兵事について記載された事務報告書などを収録。結核療養所の位置変更を求める意見書提出に関する記録もこの章に含まれる。鉄道関連では「秋津停車場設備変更届」や保谷清瀬間複線化に関する資料なども掲載している。

第３章　青年団の記録・青年学校の日誌

青年団下宿分団の記録や清瀬青年学校で記された当時の日誌類に残された記録により、

戦前期から戦時中の村の様子を紹介した。青年団が食料増産事業に関わる肥料の一括購入の取りまとめをしていたことなど、戦時体制の中で様々な役割を担っていたことがわかる。

青年学校の日誌には、戦時下の清瀬村の状況が記されている。当時の青年学校が軍事教練と農業教育に明け暮れていた様子が記されている。

第４章　戦後改革から町制施行へ

終戦改革の熱気と物資不足の困窮のなか、清瀬に革新村長が誕生した。その後、経済的繁栄の中で町制が施行され、保守系町長が誕生した。この章では、行政文書や各家に残された文書などから、当時の農業政策や施策を紹介している。昭和 20 年代半ばの分村問題や議会のリコール請求など、当時の清瀬の様子を語る資料を掲載している。

また、戦後の清瀬の生活の様子、衛生問題などの資料も掲載。清瀬が村から町へと発展していく中で生じた様々な問題について取り上げた。

第５章　農地改革下の村

戦後に行われた農地改革に関わる資料を掲載した。農地委員会に申し立てられた資料からは、当時の地主、小作の関係が垣間見え、また戦争による相続の問題、本家分家の関係など様々な問題を読み取ることができる。これまで周辺自治体において、農地改革に関する文書がまとめて保存されていた事例は少なく、貴重なものである。

第６章　高度成長と清瀬

高度経済成長により、東京の近郊都市であった清瀬にも人口増加の波が訪れた。現在の清瀬市の基礎が形作られた時代であり、当時盛んにおこなわれた労働運動をはじめ、町から市へと発展していく中での行政運営や、交通環境の変化、人口増加に伴う衛生・環境問題などを、町報、市報などの広報紙や職員組合文書、諸家に残された文書などから紹介している。

第７章　安定成長からバブル経済へ

昭和 50 年代から平成 10 年代の清瀬では、清瀬駅や秋津駅の周辺整備をはじめ、現在につながる多くの事業が行われた。また自然保護や環境問題にも力が入れられた時代でもある。本章では『市報 きよせ』や新聞に掲載された記事も掲載し、当時の清瀬のすがたを紹介している。

第８章　平成不況下の清瀬

長引く平成不況は、全国の自治体の財政へも深刻な影を落とした。清瀬市においてもその影響は深刻なものであった。しかし、財政危機の中でも市民サービスの向上を目指し、市民参加型のまちづくりをはじめ、市民サービスの向上を目指した。こうした行政を中心とした取り組みを市報や新聞記事から紹介した。

第９章　文化財の保存

本章では時代にとらわれず、清瀬市域にのこる貴重な民俗文化財の保護や、北多摩地域のなかでは早くに設置された郷土博物館等の設置などを取り上げ、清瀬市が取り組んできた文化財行政を市報や新聞記事、行政文書から紹介した。

第 10 章　現在につながる諸問題

時期を意識することなく、戦没者慰霊の問題、自動車交通、人口増加に関わる様々な問題、清瀬駅北口の再開発などを行政文書などから紹介している。阪神淡路大震災、記憶に新しい東日本大震災における清瀬市の活動など、これまで一般に知られることのなかった資料も掲載した。

『清瀬市史 6 資料編 現代』　B5 判 約 800 頁　掲載資料総数　469 点

昭和元年から平成 22 年までの清瀬の出来事や暮らしの様子がわかる資料を掲載